

## 規範意識を育成することを重視した保幼小連携交流プログラムの開発

二階堂年恵・合原晶子・沖西啓子

幼児教育と小学校教育の間には学びの連続性が成り立っているはずである。しかし、実際の教育課程や指導方法においては、その違いが大きく、子どもの実態に合ったものでなかったり、教師の指導上の難しさが指摘されているという問題点が挙げられる。幼児期から小学校への移行期は、生涯にわたって学び続けられる力を育成することが重要視されてきており世界的な潮流にもなっている。幼児期には思考力や規範意識、表現においてもすべての始まりが見られる。特に規範意識は、小学校以後の規範意識の土台となるものであり、心の教育である「道徳」や、普段の「生活習慣」等の複数の要素が含まれていることから、総合的に育てていく必要がある。

これらを踏まえて本研究では、幼児期から小学校への円滑な流れをしっかりと構成することの出来る規範意識を育成することを重視した保幼小連携交流の在り方について、子どもたちの実態を踏まえつつ、その指導内容・方法について検討していきたい。

### 1. はじめに

幼児教育と小学校教育の間には学びの連続性が成り立っているはずである。しかし、実際の教育課程や指導方法においては、その違いが大きく、子どもの実態に合ったものでなかったり、教師の指導上の難しさが指摘されているという問題点が挙げられる。

幼児期から小学校への移行期は、生涯にわたって学び続けられる力を育成することが重要視されてきており、幼児期は、思考力や規範意識、表現においてすべての始まりが見られ、重要な時期である。特に規範意識については、小学校以後の規範意識の土台となるものであり、心の教育である「道徳」や、普段の「生活習慣」等の複数の要素が含まれていることから、総合的に育てていく必要がある。幼稚園教育要領2008年改訂版では、幼小の円滑な接続を図るため、規範意識や思考力の芽生えなどに関する

指導を充実させることが盛り込まれた<sup>i</sup>。

一方児童期は、大人から自律し社会性を発達させていく時期であり、普遍的な価値観に基づく規範意識を形成していく時期である。

これらを踏まえて本研究では、幼児期から小学校への円滑な流れをしっかりと構成することの出来る規範意識を重視した保幼小連携交流プログラムの開発について、子どもたちの実態を踏まえつつ、その指導内容・方法について検討していきたい。

### 2. 幼児教育と初等教育の連続性

幼稚園教育要領解説では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かして、幼稚園の教師から小学校の教師に幼児の成長や教師の働き掛けの意図を伝えることが、円滑な接続を図る上で大切である。さらに円滑な接続のためには、幼児と児童の交流の機会を設け、連携を図



ることが大切である。」<sup>ii</sup>と示している。

また、無藤氏は、「幼小をつなぐ実践として、幼児教育の中に小学校教育の要素を取り入れたり、小学校低学年の教育に幼児教育を部分的に取り入れたりするなどを実施する試みが行われるようになってきたが、それだけではなく、4・5歳児の段階に着目して幼児教育の中に小学校につながる芽生えを探し、それを強化するような優れた実践ができると幼児教育の成果を生かした小学校教育につながるやり方がある」<sup>iii</sup>と述べている。

つまり、このような観点に立った上で、幼児期の後半で、規範意識の芽生えを子どもが培うことの出来るプログラムを開発・実践することによって、これまでの法関連教育研究を乗り越えるより効果的な教育的意義が見いだされるのではないだろうか。

保幼小連携交流の充実に向けて取り組まなければならないことは、まず幼児と小学校児童が関わることである。そのことによって互いの感性を発見したり、自分自身が成長したりすることが出来る教育的効果が期待出来るからである。また、幼稚園・保育園と、小学校の教諭間の情報交換も必要になってくる。

幼児期から小学校への移行期は、生涯にわたって学び続けられる力を重要視することが世界的な潮流にもなっており、各国では特色あるカリキュラム作りが行われている。特に5歳～7、8歳は大事な時期であるという考え方は、どの国でも認識されており、5歳児の教育・保育をどのような内容・方法にすれば、その後の子どものより良い発達につながるかは、どの国でも議論になっている。

例えば、韓国では、5歳児の「保幼一体カリキュラム」を作成しているが、そこではリテラシーよりも、市民性や全人的発達、創造性を重視している。

このように国際的にも重要な時期として注目されている保幼小接続期は、幼児教育と小学校教育をつなぐ質の高い教育が重視されているのである。そのためにはまず、幼児教育の充実が挙げられる。

幼稚園は子どもが生まれて初めて社会生活をするところであり、学校教育法に基づく学校であるので、子どもがはじめて出会う学校である。幼稚園から規範意識を身に付けることは、幼稚園の大きな役割である。よって教師は子ども同士がより良く関わり合えるような活動や支援を幼稚園段階から考えなければならないのである。幼稚園教育要領解説の第2章「ねらい及び内容」の人間関係の「内容の取扱い」の(5)では、「集団の生活を通して、幼児が人との関わりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気づき、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること」<sup>iv</sup>と示している。学校教育法においても第三章幼稚園の第二十三条の二で、「集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと」と示している。

つまり、きまりは教師が言葉で伝えるより、子どもたちが友達と関わる中で少しずつ身に付けていくものであり、教師は、子ども同士がより良く関わり合えるような環境や活動、必要に応じて子どもたちの間に入り、働きかけることが求められているのである。

例えば、3歳になると、子どもは身の回りへの興味・関心、人とのつながりが急速に広がり、親への全面的な依存の状態から自立に向かいはじめる。幼稚園はこのような発達を踏まえて、初めての集団生活の中で、一人ひとりの良さや



可能性を伸ばしていかなければならない。また、幼稚園は「遊び」を大切にした教育を行っている。この時期に思い切り遊ぶことで、その後の学びや創造性が豊かになると言われている。このため幼稚園では小学校以降の教育と異なり、教科書を使用せず、「遊び」中心の活動を行っている。

しかし、これらの「遊び」は、小学校における「国語」や「算数」等の教科と同じように子どもの将来にとって重要な学習となる。幼稚園の「遊び」と小学校の教科などは、一見何のつながりがないようにも見えるかもしれないが、子どもは、幼稚園で様々な遊びを通して、うまく人とかかわれるようになっていたり、言葉が豊かになったりすることで、小学校以降の学習の基盤をつくっているのである。

### 3. 保幼小接続の現状

幼児教育と小学校教育との接続について、文部科学省が平成25年3月に実施した、平成24年度幼児教育実態調査の市町村ごとの幼小接続の状況を表1に示した。

各市町村における幼稚園・保育所の学校教育・

保育と小学校教育との連携・接続の状況については、「ステップ2」が、62.1%(1,082市町村)と最も多く、「ステップ3」、「ステップ0」、「ステップ1」、「ステップ4」と続いている。

このように、幼児教育と小学校教育の接続は、幼稚園が義務教育、及びその後の教育の基礎を培う上で重要であると認識されているにも関わらず、多くの自治体では幼児教育と小学校教育の接続のための取り組みがあまり行われていない。その理由として、幼稚園と小学校の教育課程の接続関係が分からない、幼稚園教育と小学校教育の違いが十分理解されてない、このため教育課程の接続に積極的になれないことが挙げられている。幼児と児童の交流状況では、保育所又は小学校の幼児や児童と交流を行った幼稚園は、全体の79%(9,913園)、公立が98%(4,544園)、私立が67.8%(5,369園)であった。また、保育所又は小学校の保育士や教員との交流を行った幼稚園は、全体の75.9%(9,527園)で、公立が92.7%(4,301園)、私立が66%(5,226園)だった。

実際、具体的に幼稚園における小学校と連携

表1 連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安

ステップ0 10.7%(187)	連携の予定・計画がまだ無い。
ステップ1 8.7%(151)	連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。
ステップ2 62.1%(1,082)	年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
ステップ3 13.8%(240)	授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
ステップ4 3.2%(55)	接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議』平成22年11月11日より抜粋。



した取り組みの内容としては、①毎月、園・学校だよりなどの資料を小学校と交換する際、意見交換を行う。②卒園した子どもの授業の様子を見たり小学校での生活の様子を聞いたりしながら、小学校において大事な態度の育成について話し合う。③小学校との交流活動に際して、ともに事前の打ち合わせや事後の反省を行う。④小学校、幼稚園の教師が互いに授業・保育を参観し、教育の在り方や子どもの発達について話し合う等であった。

#### 4. 保幼小連携交流について

ー広島市立長東西小学校と近隣の幼稚園・保育園(4園)の場合ー

##### ① 具体的な流れ

では、実際に実践されている保幼小連携交流について詳しくみてみよう。

2019年12月に開催された広島市立長東西小学校1年生と近隣の幼稚園・保育園4園(広島市立長東幼稚園・長東保育園・ひとみ幼稚園・まごころ保育園)との交流会の1日のタイムスケジュールを表2に示した。

交流におけるねらいは、

- ・小学校生活の様子を知り、小学校に入学する期待感をもつ。(5歳児)
  - ・小学校生活の様子を紹介し、自分たちの成長を感じる。(小学1年生)
- であった。

##### ② 交流時における園児・児童の様子

交流する前に、小学校では園児と児童のペアをつくり、園児に渡すプレゼントを用意したりペアになる園児の名前を覚えたりしていた。1年生は普段、小学校では一番下の学年であり幼い様子に見えるが、交流時はお兄さん、お姉さんになったような気分で張り切っていた。

1年生は、「椅子に座るときは足をそろえる」、

「ランドセルはきちんと棚に入れる」、「授業の最初と最後はきちんと姿勢をする」、といったことを園児に優しく話したり、態度で示したりしていた。また、園児に教室の椅子に座らせてあげると、園児は緊張していたようだが、初めて学校で椅子に座る体験を喜んでいただけた。

教室から体育館に移動するときには、1年生が園児に「静かに歩くんよ」、「廊下は右側を歩いてね」、「まっすぐ並んでね」、と声をかけながら歩いていた。このような場面では、どの1年生もペアの園児に思いやりをもって接することが出来ていた。

園児たちは、挨拶をされたら挨拶を返す、話をする人の方を向いて聞くといったことがほぼ出来ており、日頃から園で指導されていると感じられた。このような規範意識は日常生活における指導の積み重ねが必要であり、学校生活においても求められる。人として当たり前に出ることを、幼稚園・保育園の頃から指導し、小学校生活でも同じような指導を積み重ねていくことが必要であろう。

##### ③ 全体を通して交流を通じてよかった点

園児(5歳児)と児童(小学1年生)の交流といった異学年の交流は、大きく次の3点において非常に有効であった。

まず1点目は、規範意識を育てることが出来たことである。園児と児童と一緒に何かしようとした時、やりたいことが合わずにトラブルになったり、ちょっとしたけんかになったりすることがある。そのような時に交代でする、児童の方が少し我慢するなど、感情をコントロールすることで楽しく遊ぶことが出来る。そのような体験を積み重ねることが子どもから大人へと成長していく過程で非常に重要であり、このような体験が規範意識を育てる第一



表2 広島市立長東西小学校における保幼小連携交流の1日のタイムスケジュール

時刻	活動内容	留意点
9:50	園児が到着する。 ・脱靴室で上靴に履き替える。 (グループに分かれて並ぶ。)	・学校に到着した園児から教室に入る。 ・事前のグループ分けをしてもらうようにお願いする。
10:00	1年生の教室で園児が授業を参観する。 ・日頃の授業の様子を見る。 ・プレゼント(事前に生活科で作った落ち葉のしおり)を渡す。	・スムーズにプレゼントを渡すことが出来るように、1年担任が事前にペアを作っておく。
10:10	ペアに分かれ自己紹介をする。 ・1年生の席に座り、学習規律の体験をする。 ・机の中や教科書を見せたりして、学習の様子を紹介する。 ・自分のランドセルを背負ってみる体験も取り入れる。	・1年生から名前を言って挨拶するように指導しておく。 ・立ち方・座り方・号令・返事など、ペアの1年生がアドバイスする。 ・トイレは1年生が誘導する。
10:20	体育館へ移動する。 ・1年担任が先導する。ペアの1年生と園児は手をつなぐ。  ・校長室・職員室など、中には入らず見ながら移動する。	・教室から体育館に移動する間、けがをしないように気をつける。特に階段は園児が手すりを持つように声をかける。 ・移動する間、特別教室の紹介をするように指導しておく。
10:30	体育館で交流会をする。 ・園の紹介をする。 ・1年生による学校紹介・歌。 ・ゲーム(じゃんけん列車、猛獣狩りに行くよう)をする。	・司会役やマイク係、ゲーム係などを決め、事前に練習する。 ・幼稚園、保育園には事前に簡単な園紹介をしてもらうことを伝えておく。 ・ゲームでは1年生と園児が交流出来るように工夫する。 ・園児が一人にならないように配慮する。
11:00	園児が帰る。 ・1年生は脱靴室まで行き、園児を見送る。	・ペアで握手して挨拶するように声をかける。 ・教室に戻った後、楽しかったことや頑張ったことを話し合ったり、心に残ったことをワークシートに書いたりして、振り返りをする。



歩につながるであろう。

2点目は、他人との関わり方を学ぶことが出来たことである。現代社会では人間関係が希薄になっていると言われる。人との関わり、交流、絆が大事だと言われながらも、どのように人と関わってよいのか分からない。様々な考え方の人と関わっていないので、自分とは違う他者と出会った時に、どのように接すればよいのか分からない。SNSでは他者と関われるが、面と向かってはどう関わってよいかわからない。そのような人間関係の希薄さを少しでも解消するためにも、小さい頃から様々な人と関わり、自分とは違う人の存在を知ることが大切である。同じ年齢の友達ばかりでなく、異学年で交流することで、さらに人との関わり方を学ぶよい機会になる。

3点目は、思いやりの心を育て、自己肯定感を高めることが出来たことである。同じ年齢の友達とはけんかになることが多い児童でも、下の学年の園児には優しくすることが出来ることは、往々にしてある。それも、日頃接することの少ない園児はなおさらである。そのような交流を意図的に学校の教育活動の中に仕組むことにより、人に優しくすることを学び、そこで学んだことを日常生活でも自然に行うことが出来るようになってくる。また、自分に自信のない児童でも、園児に優しく接し、自分が頼りにされていると感じることで、自信につながり、さらに自分にも出来るといった自己肯定感を高めることができる。

④ 次回への交流に生かす反省・問題点、課題  
交流会について、幼稚園・保育園の教諭にアンケートを実施したところ、次のような意見をいただいた。

- 園児が1年生への期待を膨らませることが出来た。
- 学校の様子、1年生の様子を知ることが出来て良かった。
- 園児は小学校に行くのをとても楽しみにしており、行った後も「楽しかった」と、とても喜んでいた。大切な交流活動だと実感した。
- △ 出来ればもう少しゆっくりいろいろなクラスに入って、触れあえる時間が持てれば良いと思う。
- △ 天気が良ければ、体育館だけではなくグラウンドで一緒に遊べると良かった。
- △ 学級担任の先生と話をする時間を設けて欲しい。

前述したように、園児と児童の交流は大変有効ではあるが、時間的な制約があることは否めない。学習指導要領の改訂を受け、限られた年間授業時数の中で教えなければならない学習内容も増加している。交流会をするには事前の準備があり、幼稚園と小学校が打ち合わせをしたり、プレゼントの準備、交流会での動きの確認等、細部まで検討したりする。そのような時間の有効的な活用方法を検討する必要がある。

また、保幼小の交流が年長児と1年生に限定されている。時間的な制約がある中で、さらに行事を拡大するのは難しいが、本来ならば、年長児と1年生に限定するのではなく、年中児や2年生も巻き込んで交流することで、さらにスムーズな保幼の小学校交流が出来ると考える。

以上のように、幼児・児童の交流における成果として、お互いに成長し合うような交流により、交流がイベント的なものではなく、子どもの発達にとって必要な学習の場であると共に、



お互いの学び合いの場となっている。児童は、事前・事後の学習を通して、園児との交流への思いや願いを膨らませたり、自分自身の成長を感じたりすることが出来ている。園児が小学校への期待を高めることが出来たり、子ども同士の交流の中で、それぞれの発達段階に応じた思いやりの気持ちが育まれているという交流における成果が得られている。

規範意識に関しても、トラブルやけんかになった時に自分の気持ちを調整しながら交流している様子が見えてきた。

本研究では、年長児と、小学校1年生の交流で、特に、互いに思いを主張しながらも、折り合いを付ける体験をし、それにより人間関係を調整する上できまりが必要になるということに気付く体験を味わわせることを通して、規範意識を育成することを重視した交流を考える。

幼児の社会性の発達と心の発達を促す遊び・かかわりの実践例を表3に示した。

表3 幼児の社会性の発達と心の発達を促す遊び・かかわりの実践例

年齢	感情・社会性	心の発達を促す遊び・かかわり実践例
4歳	<b>仲間とのつながりを楽しむようになる時期</b> 友達と一緒にいることが楽しくなり、仲間とのつながりも強くなる。けんかが増える半面、人を思いやる気持ちも出てくる。不安や我慢といった葛藤を経験したり、その気持ちを周りの大人に共感してもらったりしながら、人の気持ちがわかるようになってくる。	<b>砂場遊び</b> 数人で力を合わせてつくり上げる遊びに発展していく時期である。砂遊びなど、数人がかかわれるものがよい。砂を運ぶ子、山の形を整える子、自然に役割が決まる様子が見られるようになる。保育士は入り込みすぎず、それぞれの役割を見守る。バケツなど、さりげなく環境におくなど、遊びが発展するよう援助する。
5歳	<b>社会的ルールが身に付いてくる時期</b> 同じ目的を持った仲間と集団で行動することが多くなる。遊びをより楽しむために自分たちでルールを作ったり、守ることの必要性を理解していく。他の人の役に立つことを嬉しく思うなど、集団の中の一人としての自覚も生まれてくる。	<b>手伝いを楽しむ「当番劇」</b> 人の役に立つことや、喜んでもらうことで、意欲が高まる年齢である。自分たちで出来ることを話し合っ、当番を決める。
6歳	<b>仲間意識が強くなる時期</b> 仲の良い子と数人で過ごし、自分たちだけの秘密を共有するなど、仲間意識が強くなる。仲間を大事にし、ときには自分が我慢することも覚えていく。	<b>つくる・演じる劇遊び</b> 絵本を持ち寄り、みんなで話し合っってどんな劇をするか決める。役を決め、場面に必要な道具や衣装をつくることも話し合っって決めていく。役になりきることで、想像力を高める。友達と協力して、物をつくることのおもしろさを楽しむ。



## 5. 規範意識を重視した保幼小連携交流（年長児と1年生）について

### ①ねらい

- ・幼児と児童が主体的に交流をすることが出来る。
- ・遊びの中で互いに楽しみながらきまりに気付く。

### ②日時 令和3年12月〇日

### ③場所 1年生の各教室・体育館

### ④活動の流れ

10:00～10:20	授業参観・体験
10:20～10:40	体育館へ移動（校内見学・休憩含む）
10:40～11:10	交流

### ⑤ 事前準備

園児・・・○×ペンダントを作成する。

児童・・・グループごとにクイズを考える。役割分担をする。得点表を作成する。

教師・幼稚園教諭・保育士・・・事前に打ち合わせ会を実施し、ねらいや内容の確認や、グループ分け、互いの準備物について打ち合わせる。

小学校・・・校内での動線について連絡しておく。

表4 規範意識を育成することを重視した保幼小連携交流の1日のタイムスケジュール

時刻	活動内容	留意点
9:50	園児が到着する。 ・脱靴室で上靴に履き替える。 (グループに分かれて並ぶ。)	・学校に到着した園児から教室に入る。 ・事前のグループ分けにそってスムーズにグループ分けが出来るようにする。
10:00	1年生の教室で園児が授業を参観する。 ・日頃の授業の様子を見る。  ①授業クイズをする。	・園児には、あらかじめ授業の後でクイズが出されることを説明しておき、意識しながら授業を見ることが出来るようにしておく。 ・児童から、授業中のきまりに関するクイズを出し、園児が「○×ペンダント」を使って答える。 ・簡単な内容から少しずつ難易度を上げていき、興味をもって活動できるようにする。 ・園児は、クイズに答えることで楽しく参加しながら学習規律を理解出来るようにする。 児童は、園児の答えを聞くことで自分たちの日頃の活動を振り返る機会とする。





<p><b>10:10</b></p>	<p>ペアに分かれ自己紹介をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・園児は1年生の席に座り、学習規律の体験をする。</li> <li>②机の中や教科書を見せたりして、学習の様子を、紹介を兼ねたクイズをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に見たり触ったり使用したりすることを通して五感を使って体験しながら、学習規律を知ることができるようにする。</li> <li>・クイズでは、正解不正解だけで終わらず、なぜそうなのかを園児が考えたり児童が園児にわかるように説明したりさせ学習規律の意味が理解できる場面を設定する。</li> </ul>
<p><b>10:25</b></p>	<p>体育館へ移動する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>③移動途中も、階段やトイレ等での注意事項についてクイズを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・移動中も、児童が考えたクイズを出し楽しみながら規律に気付くようにする。</li> </ul>
<p><b>10:40</b></p>	<p>体育館で交流会をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループの正解数を発表する。</li> <li>④クイズ「正解はどっちだ?!」をする。グループで相談してまとまった答えを出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のグループの様子を知り、更にグループとしての意識が高まるようにする。</li> <li>・学内や登下校時のきまりや小学生としての日頃の生活習慣等についてクイズに取り入れ、児童も改めてきまりや行動について考える機会とする。</li> <li>・園児は、クイズや小学生からの助言を聞いて、きまりの内容を理解する。</li> <li>・楽しみながらグループごとの団結意識が持てるようにする。</li> </ul>
<p><b>11:10</b></p>	<p>園児が帰る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1年生は脱靴室まで行き、園児を見送る。</li> <li>・各クラスや園で振り返りをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・互いに一緒に活動したことに感謝の気持ちを持てるように、言葉をかける。</li> <li>・「楽しかった。」という気持ちは大切にしながら、交流で何を学んだかを年齢ごとに振り返りの中で明確にする。</li> </ul>

※タイムスケジュールを立案するにあたっての要点

- ・児童と園児それぞれが主体的に参加できる内容にするため、教師主導型ではなく、児童が学習規律の何をどのように園児に教えたらいいかを考える経験を大切にする。
- ・園児は、小学校で緊張して活動するだけに終わらないように、自分たちも楽しみながら参加できる活動にする。
- ・学習規律については、一つひとつに意味があることに気付かせていくことで、ただやみくもに「～しなければならない」に終わらないようにする。



※クイズの問題例（実際は児童と教師で考える）

① 授業クイズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生からの質問は、最後まで聞かなくても分かったらすぐに挙手して良いか</li> <li>友だちの発表は注意して聞かなくても良いか</li> </ul>
② 持ち物クイズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>机の上には、授業の科目に関係なく自分の好きな持ち物を出して授業を受けて良いか</li> <li>友だちのランドセルの中身を勝手に見ても良いか</li> </ul>
③ 移動中クイズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>トイレのスリッパはどちらを向けて脱ぐのか</li> <li>給食室前の「今日の献立」を触っても良いか</li> </ul>
④「正解はどっちだ?!」クイズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>大休憩中は、学年に関わらずどの遊具で遊んでも良いか</li> <li>給食で嫌いな物が出たら、友だちにあげても良いか</li> </ul>

規範意識に関わる場面において、まず、①授業クイズの場面の「先生からの質問は、最後まで聞かなくても分かったらすぐに挙手しても良いか」では、どうして先生からの質問の途中で挙手すると良くないのかを園児が考えることによって、気持ちよく人と関わるためには、『人の話は最後まで聞いてから、自分の意見を言う』という学習規律について学ぶことが出来る。

②持ち物クイズの場面の「机の上には、授業の科目に関係なく自分の好きな持ち物を出して授業を受けて良いか」では、集中して勉強に取り組むために『授業中はその勉強に必要な物だけを机の上に置く』ということを知り、そのことによって学習規律を理解することになる。

③移動中クイズの場面の「トイレのスリッパはどちらを向けて脱ぐのか」では、『次の人の立場になって行動する』ことや、『同じ向きに揃えて置くことで見た時にも気持ちが良い』等を、実際に現物や状況を見ることで理解することが出来る。

④「正解はどっちだ?!」クイズの場面の「大休憩中は、学年に関わらずどの遊具で遊んでも良いか」では、園とは異なる遊具が沢山あり興味や関心が高まる中で、『むやみにどれでも使

用して良いのではなく、安全のために使用制限がある』ということ、学ぶことが出来る。

このように、①授業参観時、②自己紹介時、③移動時、④体育館時の各交流時において、小学校における学習規律、きまり・ルールについて、児童が、園児に考えさせる場面をもうけることによって、園児が自ら主体的に考え、トラブルを起こさないために、人が気持ち良く過ごすためにはきまりが必要なこと、その意味について楽しく学ぶことが可能になるのである。児童も、そのことによって自分たちのきまりについて、再確認することが出来、園児たちにどのように教えることが出来るか、その教え方も身に付けることが出来るようになるのである。

## 6. 今後の課題

今後実践していくにあたり、以下のような事例を考慮していかなければならないだろう。

- ・幼稚園・保育園、小学校において、それぞれ教育課程や保育課程を編成しており、日常的な交流を実施するためには、これらを事前に調整する必要がある。
- ・交流活動におけるねらいを明確にし、年間計画に位置付け継続的に実施する。



- ・事前、交流の体験、事後のつながりを大切に  
して体験を深める必要がある。そのためには、  
教師や保育士が日頃から連携体制を確立する  
ことが大切である。
- ・園児、児童のそれぞれの子どもたちにとって  
意義のある交流になるように、各学年や年齢  
ごとの目標を明確化する必要がある。
- ・低学年だけでなく、中・高学年においても互  
いに育ち合うような交流を行う必要がある。  
例えば、年長児と5年生の交流活動を通して、  
翌年の入学時に1年生と6年生としての関わ  
りを意識したり期待を持たせたりする。
- ・交流活動について、保護者や地域の人々にも  
広く理解を求めていくことが重要である。
- ・子ども同士の交流活動は、地域の実態に応じ  
た交流活動のあり方を検討する必要がある。  
幼児期の終わりから小学校にかけては「学ぶ  
とはどういうことなのか」という学びの意味を  
知り、学び方を身に付ける大事な時期でもある。  
教師から学ぶことに加え、友だちから、異学年  
から学んだり一緒になって考えていく等、協同  
し学んでいくことの出来る保幼小連携交流プロ  
グラムを今後も開発、実践していきたい。

#### 【参考文献】

- ・杉本任士「児童期における社会性の発達と規  
範意識の形成」『日本大学大学院総合社会情  
報研究科紀要』No. 16, pp.167-176、2015年。
- ・中澤 潤監修 中道圭人・榎本淳子編『幼児・  
児童の発達心理学』ナカニシヤ出版、2011年。
- ・名須川知子他「幼小連携カリキュラム開発  
に関する研究」『学校教育研究』第14巻、  
pp.57-67、2002年。
- ・花城由紀子「幼児の規範意識の芽生えを培う  
ための援助の工夫～身近な人とのかわりを通  
して～」 <https://www.city.uruma.lg.jp/>
- ・湯淺阿貴子「幼児の規範意識の形成に関する

- 研究の動向」『昭和女子大学大学院生活機構  
研究科紀要』Vol.25, pp.65-83、2016年。
- ・渡邊恵子「幼小接続期の育ち・学びと幼児教  
育の質に関する研究<報告書>」平成27～  
28年度プロジェクト研究報告書。
- ・東京都教育委員会『きまりをまもるこころを  
育てるー幼児期の「規範意識の芽生え」の醸  
成 指導資料ー』2014年。
- ・東京都教育委員会『子供たちの規範意識を育  
むために』2015年。
- ・厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレ  
ーベル館、2018年。
- ・文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレ  
ーベル館、2018年。
- ・R・デフリーズ/L・コールバーグ著 加藤  
泰彦監訳『ピアジェ理論と幼児教育の実践  
モンテッソーリ、自由保育との比較研究上巻』  
北大路書房、1992年。

#### 【引用文献】

- i 中村勝美「幼稚園教育要領(2017年)改訂と  
接続期の学び」『広島女学院大学人間生活学  
部紀要』第5号、p.65、2018年。
- ii 文部科学省『幼稚園教育要領解説』p.93、平  
成30年。
- iii 無藤 隆「幼児教育から小学校教育への接  
続とは」『子ども学1』萌文書林、pp.54-  
74。
- iv 文部科学省『幼稚園教育要領解説』p.190、  
平成30年。  
幼稚園教育要領第2章人間関係3内容の取  
扱い(4)は道徳性の芽生え、(5)は規範意  
識の芽生えとなっているが、2つは重なり  
合っている部分がある。詳述すれば、道徳  
性とはつまり、よい/悪いということであ  
るが、特に幼い時期で考えると、「世の中  
には、やってよいことと悪いことがあるんだ」



という理解になる。一方で規範意識の規範とは、ルール、きまりであり、それに従わなければならないものである。例えば、交通ルールや上履きと下履きの区別などである。道徳性の芽生えと規範意識の芽生えは、一応分けて作られているが、特に幼児期においてはかなり近い概念であることは確かである。ただ、一応区別出来るということが発達心理学の研究でも言われている。詳しくは、無藤隆『保育の学校2 5領域編』pp.33-35、2017年を参照。



## **Developing an exchange program for promoting cooperate among kindergartens, nursery schools, and elementary schools to cultivate normative consciousness**

Toshie Nikaido

Akiko Gohara

Keiko Okinishi

Learning continuity develops between early childhood and elementary school education. However, curriculums and teaching methods differ between them and sometimes do not suit the children's situation, which causes problems when teaching. Cultivating life-long learning ability in the transition from early childhood to elementary school is a popular international trend. Thinking abilities, normative consciousness, and expressive abilities start developing in early childhood. Notably, fundamental normative consciousness, which is the basis of subsequent school life, moral education, and lifestyle habits, among others, must be carefully cultivated. Based on these perspectives, this study examined the teaching content and methods of an exchange program to develop cooperation among kindergartens, nursery schools, and elementary schools to cultivate normative consciousness to support a smooth transition from early childhood to elementary school, based on the children's condition.

キーワード

幼児教育 Child Education 規範意識 Model Consciousness

人間関係 The Human Relations

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

広島市立長東西小学校 Hiroshima Municipal Nagatsukanishi Elementary School